

学習意欲の低い児童の理解と個に応じた指導

—ICF支援シートの活用と手立ての工夫—

高橋 和美・池本喜代正

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第5号 別刷

2018年8月3日

学習意欲の低い児童の理解と個に応じた指導[†]

—ICF支援シートの活用と手立ての工夫—

高橋 和美*・池本喜代正**
小山市立網戸小学校*
宇都宮大学教育学部**

学習上又は生活上の困難を有する児童生徒の指導においては、その特性や困難を生じている背景についての確に把握し、指導に当たることが不可欠である。本研究においては、通常の学級に在籍する学習意欲が低く、読み書きなどの学習面で躓いている児童を対象とし、担任教師とともにICF支援シートを用いて児童の実態について共通理解を図り、教育的課題を焦点化して手立てを工夫して授業を行うこととした。その結果、適切な手立てを講じることによって、これまで以上に対象児童の学ぶ意欲を喚起し、学習の中で達成感や成就感を味わわせることができた。適切な実態把握とユニバーサルな授業づくり、そして個に応じた指導が、配慮を要する児童にとって重要であると指摘できる。さらに、今後「学び合い」の質を高めていくことが、学習意欲の低い児童にとって効果的な手立てとなることが示唆された。

キーワード：学習意欲、ICF支援シート、個に応じた指導

I. はじめに

「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」(文部科学省, 2012)の中で、「特別な教育支援を必要とする児童生徒の多くは通常の学級で学んでおり、これらの児童生徒への対応が早急に求められていると考える。そこで、今後、実態把握を行い、それを踏まえた効果的な支援を一層推進していくことが必要である。」と述べられている。換言すれば、これまで特別な支援を必要とする児童に対して、児童が持つ困難さを軽減し、達成感や成就感を高めるための適切な支援が必ずしも十分に行われていないという現実があるといえよう。

そこで本研究では、学習上又は生活上に困難を有する児童を対象として、その実態を的確に把握して児童理解を図り、個に応じた適切な指導を行うこと

により、児童の学習意欲を喚起し、達成感や成就感を味わわせたいと考え、担任教師(以下、担任)とともに指導方法や手立てについて検討することを目的とする。

II. 方法

1. 手続き

ICF支援シートを活用して学習に躓きのある児童の実態と課題について担任との共通理解を図る。そして、児童理解を基に教育的課題を焦点化し、手立てを工夫して授業を行うとともに、授業観察のエピソード記録に基づいて分析・考察する。

2. 対象児童とその実態

対象児童は、通常の学級に在籍している小学校3年生の児童(以下、A児)である。担任は、A児が不登校傾向にあり、学習意欲が低く、読み書きに課題を有しているために、指導上の困り感を有していた。そこで、担任からの情報や授業観察等を参考に、A児のICF支援シートの作成を行った。そして、シートを活用して担任と共にA児の実態と課題、今後の対応方法について共通理解を図った。

A児の家庭環境は不安定であり、母親の言うことに対して、A児は反抗的である。家庭ではゲームば

[†] Kazumi TAKAHASHI*, Kiyomasa IKEMOTO**:
A Study on Instruction to raise a Child's
Motivation for Learning.

Keywords: Motivation for Learning, ICF,
Instruction according to the individual

* Ajito Primary School, Oyama

** School of Education, Utsunomiya University
(連絡先: ikemoto@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

かりで家庭学習の習慣はほとんどない。そして、登校渋りがあり、欠席する日が少なくない。登校した時はイラついていることが多いが、徐々に落ち着き、学校では穏やかに過ごすことができている。語彙が乏しく感情のコントロールが困難なため、言葉や文字を通して自分の考えや思いを伝えることが苦手である。口数は少なめだが、他児とのコミュニケーションが図れるようになってきており、視覚的な働きかけや活動の多い図工などには興味関心を示し、進んで取り組むことができる。発達障害を疑わせるような特性は見受けられない。登校渋りや学業不振は、家庭環境との関係が考えられるが、学校においてはA児の実態を踏まえ、少しでも学習に関心を持たせ、学習活動に取り組むことによって学習意欲を喚起させることをねらいとし、具体的な目標を「興味のある事柄について文章で書くことができる」とした。本稿では、国語科の授業を通して「書く」指導に焦点を当て、書くことに興味を持たせ、書き方を示して「できそうだ」と見通しが持てるように働きかけていった実践について報告する。

3. 手立ての検討

目標に迫るために、以下の3つの指導の柱を立て、具体的な手立てについて検討した。

ア 指導の柱

- ①書く意欲を高め、見通しを持たせる工夫
- ②集中力を高め、維持する工夫
- ③安心感を与え、成就感を味わわせる工夫

イ 具体的な手立て

- ①学習予定表・ゴールの提示
- ②指示や説明、教材等の視覚化
- ③書きやすいワークシートの工夫
- ④例文やヒントカード等による支援
- ⑤動きのあるテンポのよい授業展開
- ⑥「学び合い」の質の向上

そして、授業の目標や内容に適した手立てを組み合わせ、「秋の楽しみ」「言葉を分類する」「詩を楽しもう」の授業について、担任と協力して授業づくりを行い、筆者が「書く」ための手立てを講じ、補助的に授業に参加した。

Ⅲ. 結果

授業中のA児の様子を観察し、エピソード記録に基づいて指導の柱に沿って、結果をまとめる。

1. 書く意欲を高め、見通しを持たせる工夫

(1) 学習予定とゴールの姿を視覚化

担任が、ホワイトボードに本時の流れを示しながら説明すると、A児はホワイトボードを見て、時折力強く頷きながら聞いている。そして、「こういう文章を書いていきます。」と電子黒板にゴールの姿として例文(図1)を映し出し指差すと、A児はホワイトボードと電子黒板を交互に見ながら、学習内容を確認し、スムーズに活動に取り組むことができた。

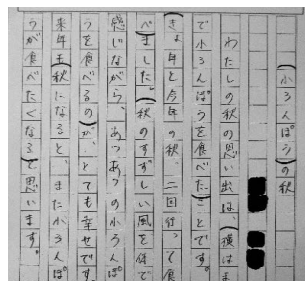


図1 ゴール姿(例文)

(2) クイズ形式等の学習活動の工夫

クイズ形式で「秋に関する言葉」を集めていく活動では、次々と映し出される写真をA児は食い入るように見ていた。担任が「これは何でしょうか。」と写真を見せると、自分が予め見つけていた秋の言葉「トンボ」が出て、A児は「あっ、トンボ!」と嬉しそうな表情を見せた。途中、季節の異なる写真を出すと、「違う。秋じゃない。」とつぶやき、にこにこしながら秋に関するクイズを楽しんでいた。

(3) 付箋紙等のアイテムの活用

電子黒板を活用して、他児が選んだ詩と紹介文を読み、感想を付箋紙に書く説明をする。授業の後半になり、あくびや体の動きが目立ち始め、疲れを見せていたA児だったが、すぐに画面に目をやり説明を聞いていた。説明の視覚化もあり、説明を理解した様子が見られた。しばらくすると、付箋紙を手にして、貼る場所に迷いながらも時間ぎりぎりを書いて貼ることができ、満足そうな表情を見せた。

2. 集中力を高め、維持させる工夫

(1) 指示・教材の視覚化、簡潔な指示

「秋に関する言葉」では、写真等を電子黒板に示すことで、画面に意識が集中する様子が見られた。また、児童の共通理解を図りやすく、担任の余分な説明を省くこともできた。

(2) 合図での切り替え、変化のある学習活動

授業前に「活動中でも、先生が『タン・タ・タ・タン・タン』という手拍子をしたら、全ての活動を止めます。そして、みんなは『タン・タン』と手拍子で返事をし、先生の話の聞くこと」を授業の約束として示した。授業中、児童たちが選んだ詩の紹介

文を書いている時に、担任が補足説明をしようと手を鳴らす。すると、他児から少し遅れてA児も手拍子をし、担任の方に顔を向け、話を聞くことができた。また、「言葉を分類する」では、一つ一つの活動時間を短くし、一人からペア、ペアからグループへと指導形態を変化させると、A児の余計な体の動きが減り、ほとんどあくびをすることもなく最後まで学習活動に取り組むことができた。

(3) ペア・グループでの「学び合い」活動

ペアやグループで伝え合う活動では、A児は他児とうまく係われないものの、余計な体の動きやあくびが減少した。活動に慣れてくると、少しずつ他児との係わりが増え、学習に集中する様子が見られた。

3. 安心感を与え、成就感を味わわせる工夫

(1) 指示の視覚化

作文の書き方指導では、電子黒板を活用し、書き込みながら説明したことで、短い指示だけでも理解した様子が見られた。A児は、電子黒板と自分の作文用紙とを見比べながら、題名や名前を正確に書くことができた。

(2) 色分けによる視覚化

図2のように板書した際にはA児はあまり興味を示さなかったが、その後の活動では、指示がなくても書き出した言葉が何に分類できるかを考え、板書を見ながら色分けをして

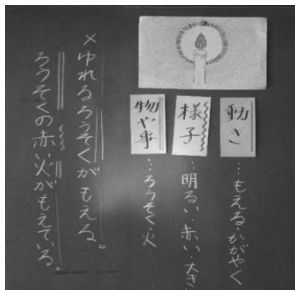


図2 色分けによる視覚化

いた。担任の説明は、何となく聞いていただけだったが、いざ書くとなると、じっと板書を見ながら説明を思い出し、色分けしながら言葉を分類することができた。

(3) 語彙不足や理解不足を補うヒントカード

「言葉を分類する」授業の中で、絵の様子から言葉を集め分類する活動が始まっても、A児はしばらく

①のヒントカード			②のヒントカード		
物や事	様子	動き	物や事	様子	動き
全書き屋 書いて、物や事	全書き屋 書いて、様子	全書き屋 書いて、動き	全書き屋 書いて、物や事	全書き屋 書いて、様子	全書き屋 書いて、動き
書いて、物や事	書いて、様子	書いて、動き	書いて、物や事	書いて、様子	書いて、動き
書いて、物や事	書いて、様子	書いて、動き	書いて、物や事	書いて、様子	書いて、動き

図3 語彙不足や理解不足を補うヒントカード

く教科書を見たり、鉛筆で遊んだりして、なかなか書こうとしない。その様子を見た担任が、図3のヒントカードを渡し、使い方を教える。すると、A児はすぐに鉛筆を持ち直し、ワークシートに書こうとした。しかし、すぐには書けずに教科書の絵を見る。そして、もう一度ヒントカードを見ながら、ワークシートに分類した言葉を書き始めた。その後も、ヒントカードと絵を見比べてはワークシートに言葉を書くことを繰り返した。

(4) スモールステップ

小活動に「3文以上」という具体的な目標を示すと、一文が長くなる傾向にあるA児だったが、一文が簡潔になり、ヒントカードを合わせて活用したこともあって書き方を理解し、4文からなる文章を自力で書き終えることができた。

(5) 「学び合い」

自分が書いた詩の紹介文を推敲するために、紹介文を他児と交換し、添削し合った。その際、誤字の訂正もあったが、内容に関し「いいね」の言葉もあった。その下書きを清書するA児の姿勢は背筋がしっかりと伸びており、これまでになく丁寧に書いていた。さらに同様の活動を繰り返すことによって、他児との係わりが徐々に増え、スムーズになっていった。

(6) ワークシートの工夫

書字が困難で文字のバランスが悪いA児に対し、枠から行、行からマスへとワークシートの形式を変えた。書く範囲を限定していくことで、多少はみ出るものの見やすい文字が書けるようになってきた(図4)。

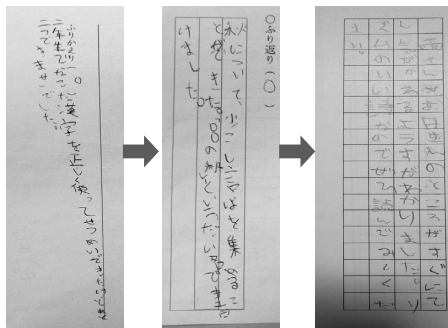


図4 ワークシートの形式による書きやすさの違い

IV. 考察

1. 手立ての成果

指導の柱である「書く意欲を高め、見通しを持たせる工夫」に関しては、常に周囲の様子を窺いながら活動をしていたA児だったが、視覚的に繰り返し確認することが可能になり、周囲を頼らずに指示を

理解することができたと考えられる。ゴールの可視化は、1時間の見通しを持たせ、A児の不安感を取り除くために有効であった。また教材を電子黒板に映し出してクイズ形式で行った学習活動では、A児は目を輝かせながら活動に取り組み、自分の思いを膨らませ「文章で表現しよう」という意欲を高めた。さらに、付箋紙等のアイテムの活用は、「使いたい」「書いて貼りたい」欲求から「書く」意欲を喚起するために有効だったと考えられる。だが、ICT機器を活用して視覚化を図れば必ずしも意欲が高められるわけではない。その必要性をよく吟味し、何を意図して視覚化を図るのかを明確にすることが求められよう。

次に、「集中力を高め、維持させる工夫」に関しては、指示・教材の視覚化を図ることは、A児の興味・関心を高めて集中して学習に取り組む効果だけでなく、担任の説明を短くする効果もあった。担任の話が短く簡潔であれば、集中力を維持させることに繋がる。また、合図で切り替えたり、学習活動に変化をつけたりとテンポのよい授業展開は、A児だけでなく学級全体の集中力を高め、維持する効果が見られた。さらに、「やりたい」「できるようになりたい」と意欲を喚起する学習課題であれば、テンポに関わらず、集中力を高め、維持することができる。と考える。

「安心感を与え、達成感を味わわせる工夫」については、電子黒板の活用によって聴覚的な刺激だけでは理解が困難であるA児に「後でも確認できる」という安心感を与え、理解を助けた。また、色分けによる視覚化は、色の違いによって分類の仕方を焦点化し、理解を深める上で有効であった。語彙不足や理解不足を補うためのヒントカードは「できるかも」と不安を解消する教材であったといえる。書字が困難で文字のバランスが悪かった点については、マスなどにワークシートの形式を少し変えたり、ノートや作文用紙を活用したりするだけで、A児にとっては大きな支援となることが明らかになった。小活動ごとの目標は、意欲を高め、達成感を味わわせるために効果的であった。「学び合い」の中での他児からのアドバイスや称賛は、充実感を味わわせ、自己有用感を高め、A児をよりよい態度へと変容させたと考えられる。

以上のような手立てを通して、学習意欲や「書く力」を高め「活動」の目標に迫ることができた。児童の学習意欲を高めるためには、「興味を持つ」「見通す」「慣れる」、そして、日常的な他児との「係わり」が大切であることを痛感した。そして、学習の

目的や内容に適した手立てを組み合わせながら講じていくことで、さらに効果が高まると推察される。

本研究を通して、ICF支援シートを活用して児童理解を図り、手立てを工夫した授業は、学習意欲の低い児童の意欲を喚起し、達成感や成就感を味わわせるために有効であったといえる。そして、全ての活動を通して、達成したり称賛されたりする経験を重ねることで自己有用感が高まり、自信を持って自分の考えや思いを伝えられるようになるだろうと考える。

「私たちの教え方で学べない子には、その子の学び方で教えよう」という言葉があるが、的確な児童理解を基に、児童の実態に合った指導方法を工夫改善していくことが、学習意欲を高め、学習の効果を上げるために大切であると指摘できる。

V. 今後の課題

「学び合い」の学習では、A児はその活動に不慣れで他児とうまく係われない様子が見られたが、慣れていくことで、徐々に他児との係わりが増えていった。今後、「学び合い」の質を高めることにより、A児が他児と係わる経験を深め、集団への帰属意識も高まることが期待できる。そのためにも「『学び合い』を通して、書く力を高める」「ヒントカードを活用して自力解決を図る」など、学習の目的と学習内容を焦点化して、適切な手立てを考えていくことが重要と考える。

授業の中では、A児は学習意欲が高まり、「わかりやすい文や文章が書けるようになる」などのよい変化が見られたが、不登校の傾向に関しては、未だ顕著な変化は見られない。家庭環境の要因は大きいですが、学校では、引き続き学習に関心を持たせ、教師や他児との係わりを大切に実践を重ねていきたい。

最後に、本研究に協力していただいた野本彩子先生に感謝します。

VI. 主な参考文献

- 1) 池本喜代正他 (2015) 特別支援教育のためのICF支援シート活用ブック, 田研出版
- 2) 西村修一 (2009) 子どもの見方がかわるICF, クリエイツかもがわ
- 3) 佐藤慎二 (2015) 実践 通常学級ユニバーサルデザインII, 東洋館出版社

平成30年3月28日 受理

A Study on Instruction to raise a Child's Motivation for Learning

Kazumi TAKAHASHI, Kiyomasa IKEMOTO